

アンケートからみえる児童の県名知識とその改善ポイント ～イメージづくりと描図の復権を～

愛知教育大学助教授 寺本 潔

1. アンケート結果をどうみるか

①地図帳への興味・関心は意外と高い

「地名・物産の記憶を強いる社会科」などと、いまだに揶揄される方がおられたら、大きな誤認である。現在の小学校社会科の内容構成や問題解決学習のスタイルからいえば、まったくその批判は当たらない。むしろ、わたくしは「行きすぎた問題解決学習」に疑問を抱いているくらいである。「行きすぎた問題解決学習」とは、言い換えれば「できる子」だけの発言で学習課題を設定し、学習内容の多くを「人々の工夫や努力」という道徳的な項目理解に集約しすぎた授業をさしている。そういうふた社会科授業においては、地図帳は単なる参考資料（特に事象の場所を確かめるだけの資料）にすぎない扱いにとどまっている。さらに、地名を記憶させることに嫌悪感を抱いている教師さえいるから驚きである。

しかし、心ある教師は気づいている。地図帳活用をもっと進める必要があることを。なぜなら、児童の郷土意識や国土像、世界像形成こそ社会科が担うべき、という社会科の責任を感じているからである。今回の小学校地図帳と県名知識に関する児童向けアンケートをみれば、意外と児童は地図帳に好感を抱いていることがわかってくる（約52%の児童が地図帳を好きと回答している）。地図帳を使うことは、確かに面倒くさい面がある。それは、目次や索引から探す手間を避け、すぐにページをめくってしまう姿からも想像できる。しかしそれ以上に、探したい情報が見つかったときや、新しい発見があった場合の驚き、喜びが大きいのも地図帳の魅力であろう。児童は地図帳の面白さに気づいている。問題は授業や生活場面において、地図帳が十分に活用されていないことにあるのではないだろうか。

②都道府県名知識調査結果

白地図を提示して都道府県名を回答させるこの調査は、オーソドックスな調査である。児童は自らの県名知識と地図上の場所を対応させながら、解答しなければならない。あいまいな記憶では対処できない問題である。この種の調査に対し、「小学

校段階で47もの都道府県の位置と名称を正確に覚えていなくてよいではないか」、「必要に応じて地図帳で確かめればよいではないか」、「実生活ではせいぜい自県と隣接県が把握できていれば小学生として十分ではないか」との意見もあるかもしれない。

しかし、である。「日本の国民としての常識」を考えてみれば、小学校段階で都道府県認識を形成できていることは、不可欠な能力といえないだろうか。義務教育段階は確かに中学校も残ってはいるものの、12歳程度の年齢発達段階において自国の構成を理解していることは、アイデンティティの形成の上でも必要である。さらに、中学校での社会科をはじめ、様々な学習や社会生活上の基礎知識としても県名知識は役立つのではないだろうか。

調査結果はほぼ予想できる結果となっている。たとえば、国士の両端や臨海県、東北地方の各県の正答率が高いのは、従来から指摘されている傾向である。また、5年生の正答率が最も高く、6年生でやや低下する点も理解できる結果である。6年生では地図帳をほとんど使わなくなるからである。誤答傾向も予想の範囲である。ただ、岩手と秋田の誤答（約48%）は予想以上に高かった。さらに、無回答県が福井・三重・山梨を代表とする傾向は、大人の世界においても同様である。これらの県からの情報発信力が高くなないことと、地図上で目立たないことも背景として考えられる。

いずれにせよ、都道府県名知識は、かなり濃淡がある知識であることは間違いない。

2. 県名知識育成に向けての改善ポイント

地図上における都道府県名知識の育成は、次の二つの点をふまえれば改善できるのではないだろうか。また、最後に、暗記させるための順序についてもふれておいた。

①その県のイメージづくり

何といっても、47もの都道府県名とその位置を理解させるには、単純な丸暗記だけでは限界があるだろう。長期記憶として生きて働く学力に定着させるためには、県名だけをいくら地図上で覚えようとしても無理がある。鉛筆片手に白地図上で県名を何度も書いて覚えようとしても、すぐに忘れてしまうに違いない。結局はその県の「イメージづくり」を丹念におこなった方がいい。「青森県=ねぶた祭り」、「成田空港は千葉県にある」、「九州の真ん中、阿蘇火山のある熊本県」などというように、連想的な事項でむすびついた知識は忘れにくい。カルタを作成させて記憶させたり、都道府県クイズやスゴロクで楽しみながら記憶させていく方法も効果的である。

ただし、一旦記憶させても、まったくふれないとおけば、記憶はどんどんあいまいになっていく。社会科だけでなく、総合的な学習や理科や国語、音楽などでも、地名が登場してきた場合に「この物語の舞台の県は東北地方の東にある県だったね」、「『荒城の月』は滝廉太郎という大分県出身の音楽家がつくったんだね」というように、機会をとらえてふれておく配慮が必要になってくる。そのためにも、教室内に日本の白地図（県境が記入されているもの）を常時掲示しておき、様々な教科や活動で話題にあがった地名や県名をそのつどチェックし、地図上に表示させるなどの活動も考えられるだろう。

家庭生活においても同様に、ニュースや観光番組、大河ドラマなどで見聞きするたびに、地図帳で確かめるのも大事なことである。教師が家庭教育に寄与できる一面であろう。

②県の輪郭を描かせる

次に大切な作業は、一度は47都道府県の輪郭を描かせることである。自分の手で輪郭をなぞらせることで、海岸線や県の形が、視覚と手との協応関係で記憶される。県のパズルも面白い（ただ、作成するのに手間がかかりすぎる難点があるが）。また、一旦、記憶させた形に動物や物の形を当てはめて記憶させる「疑似法」も有効な記憶法である。たとえば「静岡県は金魚の形に似ているね」などという比喩である。その際「尾びれのあたりが伊豆半島だよ」というように具体的な地名と合わせて記憶させる指導が大切である。

③簡単記憶術

アンケート調査の傾向を参考にすれば、効果的な記憶術が導きだせる。それは、消去法である。

まず、北海道と沖縄県は国土の両端なのですから記憶できる。

次に首都である東京都と天下の台所である大阪府という二大都市を押さえる。これで、43に減る。その次は、最も記憶しやすい東北6県を扱う。これで、37に減る。さらに九州の7県と四国4県を記憶させる。これでさらに26になる。ここからが肝心である。ここからは、児童の住んでいる地方によって記憶されにくいゾーンが異なるので要注意である。つまり、関東地方に住む児童は近畿地方が最も覚えにくく、反対に近畿地方に住む児童は関東地方の県が記憶に残りにくいからである。とりわけ、北関東4県の位置と名称、近畿南部の3県は記憶されにくい。最後に誤認されやすい県を確実におさえさせれば、かなり記憶効果は違ってくるはずである。このように的を絞って扱うことでもプロ教師の技であろう。

3. 地図帳活用単元の特設を

結局、地図を好きにさせたり、県名等を暗記させるためには、地図帳をいかに効果的に使用できるかにかかっている。しかし、これこそが最大の課題であろう。地図帳の使い方が児童に十分に指導されていないからである。社会科という教科の時間の中で地図帳の活用法自体を指導する単元がないのである。学習指導要領においても「(そのつど) 地図その他の統計などを効果的に活用し」と学習場面に応じて使用することが指示されているものの、教師や児童は実際の場面で地図帳に立ち戻って学習するという手間をはぶきがちである。

たとえば、日本の農業を学習する場合、教科書に載っている事例地域（たとえば庄内平野）や農家の記述だけを読ませ、場所の確認も、教科書に掲載された小さな位置図だけですませている場合が多い。したがって、庄内平野がどのような地形や気候のものにあり平野であるか、周辺の平野や盆地も米生産が盛んである事実など、十分に学習できないままになっている。5年生の学級で何度も目にした光景だが、棚に新品同様のまま地図帳が保管されている実態がある。地図帳そのものを使用できる単元が特設されなければ、この問題はなかなか解消されないだろう。

社会科の基礎・基本としての地図の学力は、地図帳活用から第1歩が始まることを、この調査から改めて感じるのである。